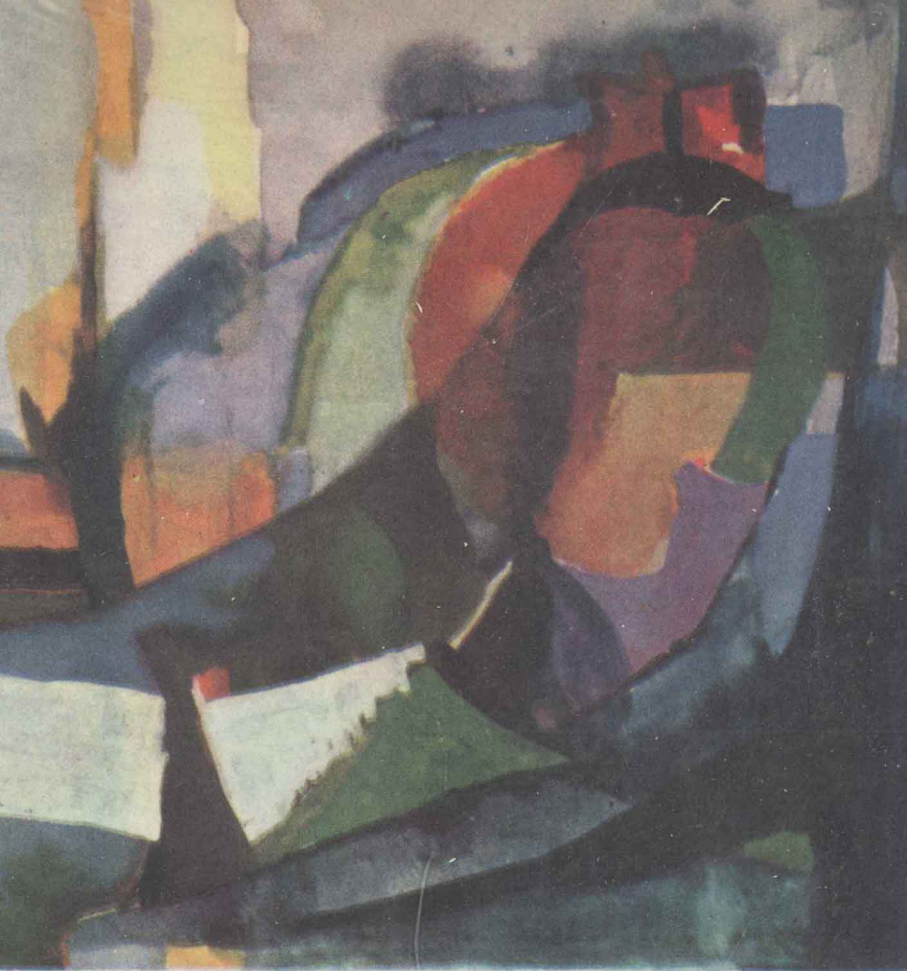




長編小説

七つの燈

林 芙美子



East Books

East Books

七 つ の 燈

© 1965 Tohosya Printed in Japan

昭和40年7月10日初版発行

定価 320 円

著 者 林 芙 美 子

発 行 者 石 渡 磨 須 子

東京都文京区高田豊川町60

発 行 所 東 方 社

電話(941)1873・7036・振替東京57774

乱丁・落丁の場合はお取替えいたします 印刷・邦文堂

長編小説

七つの燈

林 芙美子



イースト・ブックス

装
幀

石
渡
美
季
子

七
つ
の
燈

大粒な雨は急に白い飛沫にかわり、見ているうちに痛快な雨脚になり、あたり一面、みずうみの底に沈んだような景色にかわつてきた。植えたばかりの高麗檜葉は、ずぶぬれになつて、白い葉うらをひるがえしている。

敦子はさつきから呆んやりして、硝子戸ごしに、沛然と降りそゞいである雨の庭を眺めていた。座敷では、さつきから、保険会社のひとと、若い医者が来ている様子である。お父さまは一万円の生命保険におはいりになつたのだと、母が云つていたのを、敦子は何となく淋しい気持で考へていた。

この世のなかには、本当に神様つていらつしやるもののかしら、敦子の聯想はふつとまたこんなふうなところに飛んでゆく。手の甲を見ると、自分の手の皮膚は、花びらのように生々していたし、爪は月のようによく光っている。自分は幸福だとおもわないわけにはゆかないけれども、その幸福だと思ふ気持は、ほんの一瞬の、流れ去る感謝だけで、敦子はそんな、眼にはみえ

ないはかない幸福よりも、眼に見えるしあわせをがつしりとつかみたいおもいで何となく焦々して来ていた。

世の中には、もつと幸福なひとがある、自分と一緒に女学校を卒業して、方々へ飛び散つていつた幸福などもだちの顔をあれこれと心に描いてみた。

神様つて、ほんとうにいらつしやるのかしら、私はまだ、神様と云うかたを一度もみたことがない。自分はまだほんとうの神様を拝んだと云うひとにゆきあわないけれども、絵にあるような神様つて、ほんとうにいらつしやるものなのかしら……。敦子は、山行きのリュックサックを整理しながら、このごろの、何かあわたましい家のなかのことを考えている。

お父さまは、いつたい、誰のために、一万円もの保険におはいりになつたのだらう、敦子は、何時かあつたことのある父の女友達の顔をおもいだして赧くなつていた。

急に二階の妹達の部屋で、調子の高い木琴の音が鳴りはじめた。庭の雨はいつかこまかい霧雨にかわつていて、遠い空の霽れ間から、うつすりとした陽が射しかけている。

夜の汽車で敦子は妹の藤子と二人で、赤倉の友達の別荘へ発つてゆくのである。

女学校を出て、始めての夏休み、何時もは、学校の宿題や何かで、夏の休みも、そんなにのび

のびしたものにはおもつていなかったけれども、今年の夏は、敦子にとつて、何か幸福なおもいがした。

花そうび猶もかどやく

暗き葉は軽くふるえり

叢に我はめざめぬ

あわれ君もし来まさば

いまふかき真夜中

平凡至極な学校生活に別れをつけて、敦子もまた人の云う新しい社会の一員として世に送られて出て来たのだけれど、敦子の今日までの生活には、まだ、何の変化もないのだ。

根からの薄弱な氣質が、時には、小さい妹に負けそうな時もあり、母は何時、敦子さんはお嫁にいつたらいつたいどうして暮しをたてるのだらうと心配してくれるほどであつた。

女の新しい出発である結婚についても、敦子は、もう、いまから、みんなに何かしら、弱々しいとひなんをされ、父も母も、敦子には始終幼い子供に対するような心配をしているようであつた。

雨は夜まであがらなかった。

その夜、敦子は妹の藤子と二人で上野から汽車に乗った。

「お姉さん、お母さまいくら下すつたの？」

「すこーしよ」

「すこしつて、いくらよ？」

「三十円いたゞいたわ、足りるでしょう？」

「つまんないの、もつと貰えばいいのに……」

藤子は自分のリュックから黒飴を出して一つそれをしゃぶりながら、もう寝仕度をしている。猛禽のような逞しきで、藤子はいつとき小声で歌をうたつていたけれど、急に鼻の上におかしき皺をよせて、暗い硝子窓をのぞきこんでいた。

「いやーな藤子ちゃんね、ちつともじつとしてないひと……早く寝ちまいなさい」

「寝るわよ、お姉さん寝ないの？」

「まだねむくないの、暑くつて寝られやしない」

三等車の中には、敦子達のように、山行きの仕度をした若い人たちが沢山乗っていた。汽車が熊谷をすぎると、もう、元気のいゝ軋声があつちこつちからはじまつた。

時々、眼をあけては、敦子は窓に顔をくつゝけて暗い雨を眺めている。

誰かが口笛を吹いているのか、ふつと、チャイコフスキーの悲愴がきこえてきた。敦子はおやおもいながら、口笛の主を眼で探したけれど、何時の間にか、悲愴の節はあとかたもなく消えてしまい、汽車のきしる音のみが耳について来る。

赤倉へ着いたのは夜明けだつた。

さとみが、小さい弟を連れて田口の駅まで迎えに来ていた。山は湧きたつような緑で、空にはいろいろなかたちをした白雲が流れている。近くの山陰で、じゆずかけが、ぽおぽッ　ぽおぽッ　と啼いている。眠たくなるような山の景色だつた。

さとみは敦子とは同じクラスで、平凡な敦子には、類を呼ぶとかで、さとみの平凡さとは、非常にうまがある。学校を出てからも時々二人は忘れないでゆきゝをしていた。さとみは美しい娘ではなかつたけれど、誰からも好意を持たれるようなめだゝない顔だちである。敦子は小柄なさ

とみと違つて、軀はすくすくと大きく、顔の小さい、皮膚の白い娘で、笑うと、カチツとした皓い歯が、さきさきした果実のように美しかった。

さとみの別荘は、まるで小舎のように古い家だつたけれど、山でやとつた女中に、さとみの祖母との小人数な気兼ねのない住いで、藤子なんかは、着くなり、裸足で芝生におりてごろごろ転がつていた。

鶯も啼いているし、山鳩もよく啼いている。

敦子は、毎年海へは出掛けて行つたけれども、山へ来たのは始めてだつた。よく晴れているので、紫色の山々の屋根が、まるで襖絵のようだつたし、八ヶ嶽や、戸隠、白根のうつそうとした山姿は、敦子の眼には、何か、山霊にふれたような気持である。

庭は百坪ばかりの明るい芝生にかこまれていたけれど、裏手の藪の向うは、小暗い縦林のつづきで、風もないのに、落葉がひらひらしている小径があつた。

敦子はこの山荘で夢のような一週間をおくつた。

今日も、芝生に草座を二三枚持ち出して、脊の高いポプラの木かげで歌をうたつたり、編物をしたりして何時のまにか、みんなそこへごろりと横になつていた。ゆめうつゝで、梢を渡る風の

音や、小鳥の鳴きさわぐのをきいていると爽やかな山気は、こゝろよいねむりをさそつて来る。不意に別荘の前で自動車がとまつた。玄関へ荷物をはこんでくるような声がしている。

「さとみ！ お父さまですよ……」

さとみの祖母が、芝生に寝ころがっているさとみ達を呼んでいる。やつと深い眠りにはいりかけたとみえて、敦子や、藤子は、さとみの祖母の呼ぶ声は耳にもはいらなかった。

「何だ、よく寝てるんだな、まるで河岸のまぐろみたいだぜ……」

柴折戸から這入つて来た、若い男が、さとみのそばへしやがんで、さとみの寝顔を眺めていたが、さとみのすぐ隣りに寝ている、敦子の可愛い寝顔の方へ眼がうつると、その若い男は、妙にどぎまぎした表情で立ちあがつた。薄紅い唇から皓い齒がのぞいていて、白い頬の上に、ポブラの青葉のかげがおどつている。長いまつげには、女らしいほのかな情熱がひそんでいるように見える。

敦子はふつと眼をあけた。

紺の服を着た青年がポブラを背につゝ立つているので、敦子は驚いて飛び起きた。さとみも起きた。

「まア！ 何時来たの？」

さとみが、頬に莫座のあとをつけて、まぶしそうに青年を眺めた。

「お父さんも来てるンだけ……」

「電報でも打てばいゝのに……」

蟬取りに行つていたさとみの弟が、汗びつしよりになつて、走つて戻つて来た。

「啓ちゃん、お父さん来てるのよ」

「本当かい？ 一緒に来たの？」

「あゝ」

青年はさとみの父の末弟にあたり、伊藤晟次と云う。

夕方になると、みんなで観光ホテルに食事に行つた。晟次は如才のない明るい男で、敦子が氣にいつたらしく、何時も敦子へばかり話しかけようとしている。

夜は素晴らしい月夜だつた。

ロビーでは、晟次の買つて来た花火をたいたりして皆で興じあつた。

ホテルを出て別荘へぞろぞろ戻つて来ると、月で光つた芝生に椅子を出して、晟次とさとみ、

敦子に藤子の四人は、夜更けまで、山の彼方へ月のあがつてゆくのを眺めていた。星も澄んできれいだつた。

しばらくすると、さとみと藤子は疲れが出て来たのか、藤椅子の脊に頭をもたれさして、きもちよさそうに眠っている。

「敦子さんはずつとおうちへいらつしやるのですか？」

「えゝずつと家にいますの」

「遊びに行つてもかまいませんか」

「どうぞ……」

「お母さんもお父さんも、僕がうかゞつても気にかけるようなひとじゃありませんか？」

敦子は返事に困っていた。

脊が高くて、眼の色はひとのこゝろをささうような深い表情だつたし、眉は濃くつて、白皙な額には、深山のような神祕なただよいがあつた。

晨次と敦子の間の真中の椅子にさとみと藤子が眠っているので、二人は思い出したように時々語りあうだけだつたけれども、夜露で軀が冷くなつても、敦子には部屋へはいるのが、何となく

おしまれるような夜だつた。

晟次は三日ばかりしてさとみの父と東京へ帰つていつた。田口の駅まで、さとみや敦子たちは自転車で二人を送つて行つた。

さとみの父も、おだやかな敦子の氣質が氣にいつたらしく、晟次の真似をして、汽車の窓から敦子に固い握手をしたりしている。

汽車が出てゆくと、三人は田口の町で少しばかりの買物をして帰えつた。さとみの父や叔父がいなくなると、別荘はまたもとの静けさに戻つて、鳴きたてるひぐらしや蟬の声に、平和な朝夕を感じる。

「晟次さんね、とても敦子さんが好きですつて、あなたをお嫁さんにほしいんだつて……」

「うそよ……」

「あら、ほんとだわ、私にそう云つたんですもの……」

散歩をしながら、さとみは敦子へこんな話をしていた。

「もし、晟次さんが一生懸命だつたら、あなた、お嫁にゆく？」

「だつて、そんなことわからないわ、——でも、お嫁さんなんか、私、とてもなれつこないの、家のもの、みんな、私にはそんな資格がないつて云うのよ……」

「どうしてかしら？」

「莫迦だからでしょう」

「まア！ そんなことないじゃないの、いやアねえ……」

「私、働くことを考えようかと思つてゐるの、タイピストにでもなつて、家じゆうのものをあつと云わせてみようかと思つてゐるのよ、——だつて、何も出来ない何も出来ないつて、すぐ、藤ちゃんにくらべるんですもの……」

「タイピストね、私も、そんなこと考えていたんだけど、——だつて、たゞ、こんなに遊んでたり、お稽古事してたつてつまらないんですものね……」

「あなたは、神様をおがんだ事あつて？」

「神様？」

「えゝ、私、学校にゐるころは、そんなことなんか少しも考えなかつたのに、此頃、何もすることがないせいか、人間つて、たゞ生きてゐるだけなのかしらなんて考えはじめてゐるの……本に